

## 第4段階：ガリラヤにおける大宣教

### I. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波

デイリー・ジーザス・ニュース #118

#### 11. イエスの弟子の多くがイエスを拒絶する

ヨハネ6.52-59

60 これを聞いた弟子の多くは、「これは難しい教えだ。誰がこれを完全に受け入れることができるだろうか」と言った。

61 イエスは弟子たちがこのことについて不平を言っているのを知って、彼らにこう言いました。

「これはあなたを不快にさせますか？ 62 では、人の子が以前いた場所へ昇っていくのを見たら、あなたは  
どうするでしょうか。」

63 「永遠の命を与えるのは御霊です。肉は無益です。わたしがあなた方に語った言葉は、御霊に満ちており、堅く立っています。」そして永遠の命を与えます。 64 しかし、あなた方の中には信じない者もいる。」

イエスは、彼らのうちのだれが信じないか、だれが自分を裏切るかを初めから知っておられたのです。 65 彼は続けてこう言った。

「だから、父が永久に与えてくださらない限り、誰も私のところに来ることはできないと、私はあなた方に  
言ったのです。」

66 この時から、弟子たちの多くは離れ去り、もはやイエスに従わなくなった。

67 「あなたも帰りたくないでしょう？」 イエスは十二使徒に尋ねました。

68 シモン・ペテロは答えた。「主よ、わたしたちはだれのところに行けばよいでしょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。」 69 私たちはあなたを確信してここに来ました、そして、あなたが神の聖なる方であることを本当に知っています。」

70 するとイエスは答えた。「十二人の皆さん、私が選んだのではないですか？しかし、あなたたちのうちの一人は悪魔のようです！」

71 彼が言ったのは、シモン・イスカリオテの息子ユダのことである。ユダは十二使徒の一人であったが、後にイエスを裏切ることになる。

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ = <sup>MT</sup>、マーク = <sup>M</sup>、ルカ = <sup>L</sup>、ヨハネ = <sup>J</sup>、使徒行伝 = <sup>A</sup>。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書書

## 第4段階：ガリラヤにおける大宣教

### I. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波

を識別します。さらに、*イエスの言葉は赤字で斜体で書かれています*。旧約聖書からの引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト	
位置	カペナウムのシナゴーク
タイムライン	4月上旬（26ヶ月目）
イエスの生涯の文脈	第4段階：ガリラヤにおける大宣教
	I. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波
タイトル	11. イエスの弟子の多くがイエスに従うのをやめる

コメント：

過去12ヶ月間、世論の潮流がイエスに反する方向に傾いていたことを見てきました。その1年前、エルサレムで安息日にイエスが癒やしを行われたこと（ヨハネ5章）をきっかけに、ユダヤ教指導者たちの間で安息日の遵守をめぐる一連の論争が始まりました。イエスが安息日に「働き」、説教を続けるにつれ、論争はその後3週間にわたって激化しました。パリサイ人たちはイエスを死なせなければならないと決め、イエスは彼らとの公の場での交わりを避けました。

その後、イエスの二度目のガリラヤ巡礼の際、彼らの反対はエスカレートし、イエスが悪魔に取り憑かれ、悪魔の力で奉仕していると非難し、聖霊を冒瀆するに至りました。イエスは公の教えと説教の中でたとえ話を用いてこれに対処しました。

さて、第三回巡回の終わりに、イエスが自らの肉を食べ、自らの血を飲むという教えを説いたため、多くの弟子たちがイエスを拒絶し、イエスのもとを去ってしまいました。イエスに対する積極的な反対は指導者層から始まり、多くの一般民衆に広がり、ついにはイエスの弟子たちの交わりにまで浸透しました。一方では、群衆はイエスを力づくで連れ去り、イエスの意志に反して地上の王にしようとしてしました。他方では、弟子たちを含め、社会のあらゆる階層の人々が公然とイエスを拒絶していました。第三回ガリラヤ巡回は、大きな拒絶と離反で幕を閉じました。それは決して美しいものではありませんでした。

弟子たちからのこの拒絶は、イエスの宣教におけるもう一つの重大な転換点となりました。イエスは間もなくイスラエルの領土を完全に離れ、ガリラヤの北と東の地域へと向かいました。ガリラヤから離れながらも、残された弟子たちの訓練をさらに強化していきました。

弟子の大多数が離反した時、イエスはどのような反応を示したか。それは宣教における反対や失望にどう対処すべきか、その模範を示しています。拒絶は極めて個人的な問題として受け止められたに違いありませんが、イエスは神の国への視点を保ち、人間の利益ではなく神の利益に焦点を合わせ続けました。

## 第4段階：ガリラヤにおける大宣教

### 1. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波

拒絶されたからといって、イエスが福音のメッセージの真正さや有効性を疑うことはありませんでした。イエスは、ご自分の言葉が聖霊に満ち、信じるすべての人に永遠の命を与えると断言されました（ヨハネ6:63）。メッセージ自体に問題があるのではなく、神の力なしには人間の能力（「肉」）は無益であり、永続的な価値あるものを何も成し遂げられないという点が問題でした。人間からの拒絶によって、イエスはご自身とメッセージを通して働く聖霊の力を疑うことはなかったのです。

第二に、イエスは父の主権に対する信仰を貫きました。イエスは既に、父が主権的に信仰を可能にしてくださいという限り、誰も私を信じることはできないと語っておられました（6:44）。もし人々がイエスを拒絶したり、信仰を捨て去ったりしたなら、それはそもそも父が彼らに信仰を与えてくださらなかったことを示しています。拒絶はイエスに向けられたものでしたが、イエス自身に向けられたものではありません。それは単に父の計画と働きの啓示だったのです。

イエスは聖霊の力によって、父の視点を通して自分に起こるすべての出来事を見ました。イエスは「成功」にこだわるのではなく、父の絶対的な計画に心を集中していました。

イエスは、御霊の力によって御自身を通して働き、御父の至高の計画によって、真の信仰を持つ力を持つ人々がいることを知っていました。それは、最後の最後までイエスを信じ続ける人々です。ペテロは十二使徒を代表してこう言いました。

68 「主よ、わたしたちはだれのところに行けばよいでしょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。69 わたしたちは、あなたを信じるに至りました。そして、あなたが神の聖者であることを、本当に知っています。」

イエスを信じる信仰は、私たちを決定的な方法でイエスを体験させます。神の言葉の力、神の愛、喜び、平安の内なる豊かさ、すべての罪が赦されたという確信、そしてイエスと共に生きる永遠の命の確信を一度味わうと、私たちは決して同じではられません。ペテロや他の十二使徒のように、何度もつまずき、倒れることもあるでしょう。時には公然とイエスを否定するほどだったとしても、私たちはイエス以外にどこにも行くところがないという事実から逃れることはできません。私たちは最後には必ずイエスのもとに戻るのです。

宇宙の創造主が人間の肉体をまとった御方に匹敵する「神」、宗教、教え、哲学、力は他にありません。イエスとその御言葉は、人生のあらゆる側面において究極のものです。私たちがどれほどイエスを失望させようとも、イエスは決して私たちを失望させたり、見捨てたりされないことを私たちは知っています。

真の信者は、イエスを実際に見て体験し、他の誰かに従うことで破滅するほどです。イエスが説教で約束されたように、「天から降って来て永遠の命を与えるパン」としてイエスを一度食べると、私たちは二度と永遠の命に飢え渴くことはありません。なぜなら、私たちはイエスの中に永遠の命があることを知っているからです。真の弟子は、すべての被造物の中で、主の無限の価値と栄光に匹敵するものは何もないことを、永遠に学びました。

応用：

## 第4段階：ガリラヤにおける大宣教

### I. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波

証し、そしてあらゆる奉仕には、反対や失望の時が伴います。イエスに倣い、私たちも、自分の働きの目先の「成功」や「失敗」ではなく、私たちを通して働く聖霊の力と、私たちの前に立つ神の主権に目を向け続ける必要があります。

宣教は神の業であり、その結果は、地上で働いている私たちには到底想像できないほどの神の知恵と計画によって定められます。天国に辿り着くとき、私たちはついに、神が私たちを通して、しばしば私たちの意に反して成し遂げてくださった偉大さと栄光を目の当たりにするでしょう。

その間、私たちには主以外に頼れる場所はありません。困難に直面しても忠実さと自信を保った主の完璧な模範を心に留めながら、慰めと励ましを求めて主に駆け寄るべきです。

あなた自身の証しと奉仕において、聖霊の二重の力と父なる神の権威にイエスとともに焦点を合わせ続けるにはどうすればよいでしょうか。

今、宣教に励むことに落胆している人をご存知ですか？この聖句にあるイエスの模範を通して、どのように彼らを励ますことができますか？いつそうする予定ですか？